

鷺ノ木村米屋長七の  
大散財の逸話

明治十三年五月六日の新潟新聞にこんな話が載っています。  
——鷺ノ木村の米屋長七は生まれつき肉が大好きでしたが、縮まり屋で「肉は食いたいが高くてのう」と愚痴つてばかりいました。そんなとき近所の子供たちが「縁の下にカワウソが巣を作って子供を産んでいるぞ」と言って騒いでいました。

これを聞きつけた長七は飛び出してきて「このガキども、オラ家で飼っているカワウソに手でも付けてみやがれ、ひどい目に遭わすぞ」と脅かして追い払いました。長七は「こいつはちやうどいいことを聞いたわい。しばらく魚が食えないで困っていたところだ。それに今はラッコの帽子がはやっているが、あれはカワウソの皮だとみんな言っている。カワウソの皮をはいで皮屋へ持ち込めば六、七円にはなる。肉を食ったり、金をもうけたりで悪くはないわい」と言いながら、部屋の畳を剥がす上げて探しまわした。すると案の定、押し入れの下にカワウソの子が四匹いたのです。

それなら何とかして、親カワウソも捕らえたいと思い、一匹の子カワウソを縄で縛り、お

なを仕掛けて元のようにかモフラーージュしました。

今か今かと待っているうちにドタバタと大物がわなにかかりました。それを用水に投げ込み、妻にはなべを用意させ、せがれには酒を大野町へ買いにやらせました。

あまり大物だったもので、しばらくして引き上げてみると、なんとそれは年を取った白ギツネ



15

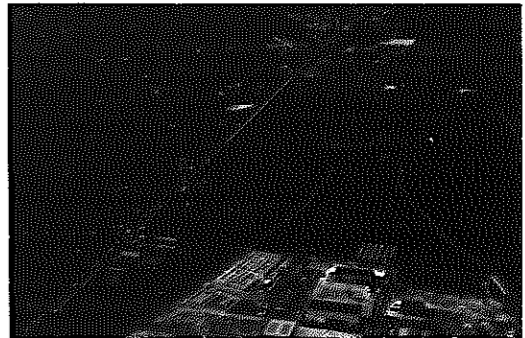
カワウソと白ギツネ

でした。仰天した長七はたたりを恐れてお寺に駆け込み、和尚さんに相談して大法事を営み、懇ろに弔ったということです。

カワウソの料理を食べるつもりが、菜びたしとフナのなますに変わり、酒は一人に一斗も振る舞う大散財になったというお話でした。

こんな話が新聞に載った明治時代、白根郷は全体が水郷に近

空から見たかつての大場・曾根郷の中心部。現在は開発が進み、工業団地、住宅地となっている。



い景観で、シギが大変多く住んでいたということでした。

そのころ鷺ノ木村は広大な太婦潟のへりに位置していました。潟には淡水魚が豊富に生息していましたから、それをえきにするカワウソがいたことは確かでしょう。明治十年八月十日の新潟新聞に「畑の中でギツネの子を捕まえた」という記事がありますから、ギツネもまた生息していました。

昔の新聞をひもといてみると、のどかな水郷地帯の様子が目に浮かぶようです。

25年前はキャンプ場!? —— 古川神社

語る人

渡辺 誠さん

(能登5・三十九歳)



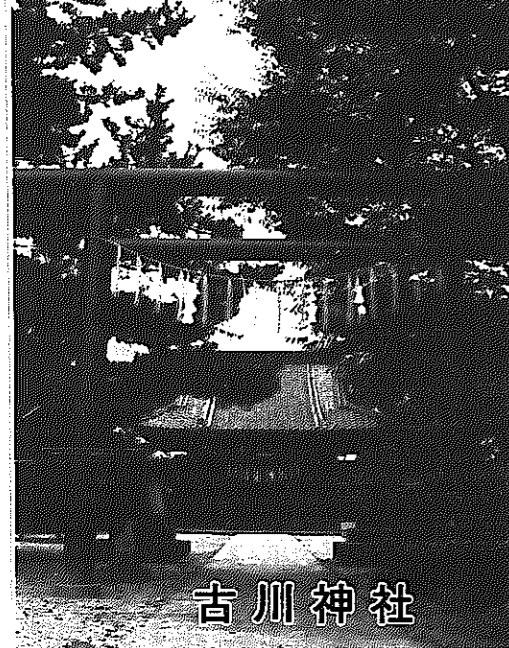
私の思い出  
あの時この場所

古川神社は、昔は今のように住宅地ではなく、田んぼの中にあり、神社から理研電線の工場がよく見えたものでした。私は中学生のとき、ボーイスカウトに入隊していて、この場所

でキャンプをしたり、ハイキングのポイントにしたりして、ボーイスカウト活動の場として利用していました。

私が中学二年生のとき、自転車で全国縦断をしていたドイツの青年が、この神社にテントを張って泊まったことがありました。私たちも十数人で一緒にテントを張り、英語の先生を引っ張り出してきて、交歓会を行ったことを懐かし思い出します。身振り手振りの交歓でしたが、とても楽しかったことを記憶しています。古川神社は、二十五年前はキャンプ場でもあったのです!

▲ボーイスカウト発足当時(昭和38年)の記念写真。右から三番目が渡辺さん



古川神社

今、時代の学生

教育委員会社会教育課  
佐藤 正則

体験こそ生き生き!

生活と結び付いたさまざまな学習を行うことにより、心を豊かにし、生きがいのある充実した人生を送るのが生涯学習です。学習という言葉は付いていますが、特別な先生がいなくても、学べることは多いのです。

この夏休みに県教育委員会主催で、小学校六年生と中・高校生四百五十五人が北海道で船に宿泊しながら、一週間さまざまな体験活動をする研修があり、本市からも小学生四人、中学生一人、高校生一人が参加しました。

参加した子供たちはいろいろな体験を重ねていくにつれ、表情が生き生きしてくるのが分かりました。台風の影響で船酔いが続出し、夕食にスベアリアプが出されて戸惑ったり、電話機を見つけては家庭に連絡しようと涙ぐましい努力をしたりと、家族、友達、自

分、故郷などについて思いを新たにしたようです。これも体験を通して心を豊かにする学習の一つといえそうです。

豊かな心って?

この「豊かな心」とはどんな心でしょう。例えば、今の社会風潮では死語に近いのですが「ありがたい」「もったいない」「おかげさまで」というような気持ちが持てたらどうでしょうか。ほかから学ぶことも多くなり、毎日の体験が豊かなものになってくるのではないのでしょうか。

このように心を豊かにする学習をどう進めたいか検討するため、白根市生涯学習推進協議会が設けられました。次回からはそこで検討されている内容を紹介します。

私の一冊

No.7

「女の階段」  
日本農業新聞



柳瀬ミツさん  
(下道湯・73歳)



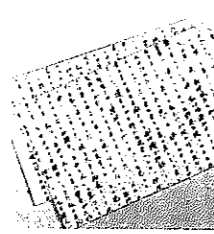
私の一冊は「女の階段」です。この本は、日本農業新聞の女性読者の投稿を、掲載二十年を記念して、昭和六十一年に一冊の本としてまとめ、発行されたものです。私が日本農業新聞を読み始めたのは日も浅く、この「女の階段」が二十年も前から掲載されていると知り、とても驚きました。

「女の階段」を読むと、農村の女性が、手を取り合い生き抜いてきた生の声が、ひしひしと伝わってきます。嫁姑の話、子供のこと、家族のこ

となどが数多く書かれています。

私は「女の階段」を四年間休むことなく、読み続けています。また、いい話には切り抜きもします。多くの人から読んでもらいたいと思い、紹介をさせていただきました。

励まし励まされて20年



市立図書館新刊案内

市立図書館 ☎373-2810

高齢者にお勧めする本を紹介いたします。  
六十歳からの生き方(多湖輝)  
この国のかたち(司馬遼太郎)  
治療塔(大江健三郎)  
きのね上・下(宮尾登美子)  
シブイ(開高健) いきいき  
老青春(田村総) 還暦老人  
憂愁日記(山口暲) 人生って何なんだ(佐藤愛子) 私  
のしあわせ人生(宇野千代)  
死の社会心理(石川弘義)  
ローハは一日にして成らず(樋口恵子) ほか多敷

▶私の思い出 あなたの心に残るあの時の思い出をお寄せください ▶私の一冊 あなたの愛読書をご紹介ください ▶あて先 白根市役所広報広聴係(〒950-12 白根市大字白根1235・☎373-2111③333) 皆さんの便りをお待ちしています

原稿募集